

体験交流活動を中心とした研修における自律学習支援を 学習者はどう捉えたか

熊野七絵・石井容子

1. はじめに

国際交流基金関西国際センターで実施している日本語学習者訪日研修（大学生）は、体験や交流といった活動を中心とする日本語研修である。研修では、教師主導に慣れた比較的受身な学習者が、研修中の様々な活動に主体的に取り組み、自律学習を意識化すること、そして、研修での学びを帰国後の継続学習へつなげることを目指し、自律学習支援のための活動を各種取り入れている。本稿は、設定された自律学習支援活動や評価の方法について、研修参加者がどのように捉えているのか、調査を行った結果を報告し、考察するものである。

2. 研修の概要と自律学習支援

日本語学習者訪日研修（大学生）は、海外の大学で日本語を履修している大学生を対象とした6週間の滞在型研修である。学習者のレベルは初級終了から日本語能力試験2級合格程度、研修参加者の人数、国籍は研修によって異なるが、約20～40名、5～18カ国の多国籍の研修である。（熊野2008参照）

この研修では、短期であること、また帰国後の学習継続を奨励するための研修であることから、新しい漢字や文法を学習するということは目的とせず、訪日の機会を最大限に生かすため、①学習してきた日本語を使う、②日本を体験し理解する、③これからの日本語学習に役立つ発見をする、ことを目標とし、体験・交流活動を通して日本語を学び、日本文化・社会への理解を深め、帰国後の継続学習へつなげることを目指している。また、評価も数値評価ではなく、個々の学習者の設定した目標に沿った自己評価を中心とし、研修中の記録や成果物を含むポートフォリオ評価を行っている。

そのため、6週間の研修を図1のように進めている。まず、授業としては、日本の教育、家族などのトピックごとに学び、ディスカッションする「日本理解」、自国紹介などの発信をする「スピーチ」、日本人に実際にインタビューをしてグループでまとめて発表する「インタビュー」がある。また、小学校訪問、大学生や地域の国際交流団体との交流会などがあり、これはスピーチの発表、インタビュー活動の機会ともなっている。そして、文化社会体験として、大阪、広島、京都、東京などへの研修旅行、ホームビジットなどの社会体験、着付けや書道など伝統文化体験の機会がある。このように日本人との交流会や日本で文化社会体験と日本語の授業を関連付けるようカリキュラムが組まれている。

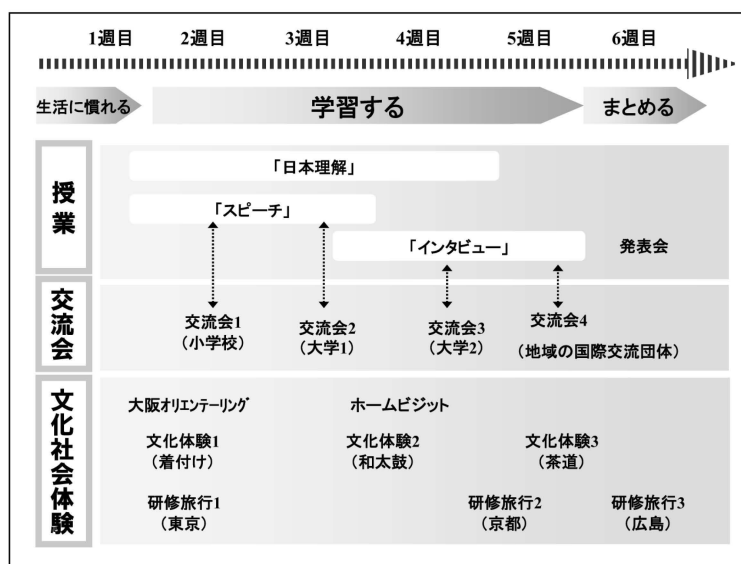


図1 体験や交流を中心とする大学生訪日研修の全体像

この研修では、教師主導に慣れた比較的受身な学習者が、研修中のさまざまな活動に主体的に取り組み、自律的な学習者となっていくことを目指し、(1)「自己目標設定・自己評価」、(2)「研修活動の記録」、(3)「週フィードバック」、(4)「自己評価チェックリスト」などの自律学習支援活動を設定している。各活動の概要は、次の通りである。

(1) 自己目標設定・自己評価

学習者は、研修開始時に「日本語」「体験」それぞれの自己目標を設定し、修了時に目標毎の自己評価を行って、帰国後の目標を設定する。教師が設定した目標ではなく、学習者個人による目標設定を行うことで、交流や体験を中心とする研修において学習者が主体的に活動に取り組むことを狙いとしている。自己目標、自己評価及び帰国後の目標は、図2のようなシートに記述される。

(2) 研修活動の記録

学習者が週1度、個人で記述する記録である。ある特定の授業を対象とするものではなく、研修全般及び日本での生活の中での気づきを、図3のように、「日本語、体験、生活」の3つの観点からまとめ、それぞれに具体的なエピソードや考えを交えて記述する。この記録は、学習者が内省活動に慣れることを狙いとしている。

(3) 週フィードバック

「研修活動の記録」に記述した気づきを、他の学習者と共有する活動である。週の初めに、研修に参加する学習者が全員集まり、まず、4、5名のグループ内で「研修活動の

記録」の項目ごとに、個々の記述に基づいて話し、相互に質問したり、話し合ったりする。次に、各グループから1人が印象的だった意見などをまとめて全体に向け発表し、自由に全体ディスカッションを行う。学習者はその後、「週フィードバック」で気づいたことや考えたことを「研修活動の記録」に書き加え、担当教師に提出する。教師は日本語面の添削とともに、内省を深めるためのアドバイスを記入し、学習者に返却する。「研修活動の記録」による互いの気づきを共有することで、理解を深めることを狙っている。

(4) 自己評価チェックリスト

研修において行った「交流（交流会、ホームビジット）」「生活（研修旅行など）」等の活動や、「インタビュー」「スピーチ」といった日本語科目について、能力記述文を使って、学習者が自分の日本語能力をチェックするためのリストである。CEFRの能力記述文に基づいて、図4のように、各活動や科目における遂行課題についての能力記述をA2からB2までのレベルごとに段階的に示してある。研修終了時に、日本語を使って行った活動を振り返り、能力記述文に沿って、自分の現在の能力を確認することで、継続目標の設定の助けとすることを狙っている。

(5) ポートフォリオ

体験や交流を重視したコースにおける評価として、研修では、テスト等による数値評価ではなく、ポートフォリオ評価を行っている。ポートフォリオには、研修の目標と内容、自己目標と自己評価、研修活動の記録、スピーチ原稿やインタビュー発表原稿及び資料などの成果物、教師からのコメント、自己評価チェックリストなどが含まれる。

図2 自己目標・自己評価

図3 研修活動の記録

図4 自己評価チェックリスト

研修の流れに沿って、(1)～(5)を確認すると以下のようなになる。(図5)

学習者は、研修開始時に教師やクラスメートとの話し合いの中から研修中に達成したい日本語と体験についての(1)自己目標を立てる。その後、週に一度、各自で一週間の活動や体験を振り返って「(2)研修活動の記録」を書き、その活動記録をもとに、「(3)週フィードバック」活動で気づきを共有する。そして、研修終了時には、教師やクラスメートと共に記録を振り返りながら(1)自己評価を行い、研修終了後の継続学習の目標を立てる。また、(4)自己評価チェックリストに記入する。その後、教師は各自の自己目標、自己評価と照らし合わせながら、研修中の各科目や活動全般へのコメント評価を行い、学習相談(個別面談)で(5)ポートフォリオを渡し、今後の学習のためのアドバイスを行う。

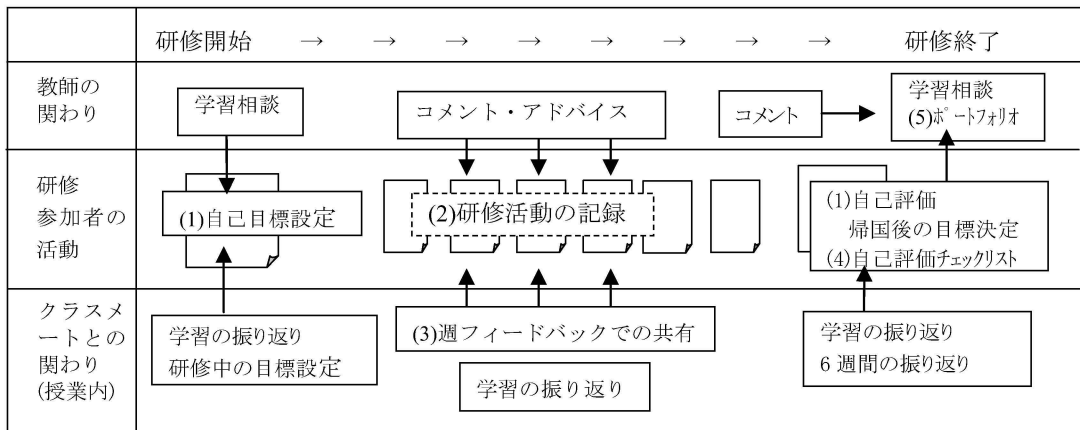


図5 自律学習支援・評価の全体像

3. 調査の目的と方法

自律学習支援の各活動について、石井・熊野(2008)では、(2)「研修活動の記録」をもとに、学習者の日本語や日本文化・社会への気づきがどう変化し、「自己評価」にどのような影響を与えるかを分析し、個人内の変容の過程を検証した。

日本語面では、学習者は内省を繰り返す中で、日本人の生きた日本語や学習者自身の日本語運用能力への気づきから、帰国後の目標へつながる記述へと内省を深めていた。また、文化・社会面では、体験・交流や生活の中での気づきを繰り返しながら、独自の視点で考察を深め、新たな日本観を作っていく様子がうかがえた。日々の発見や驚きを定期的に記述させることが、言語や文化について見つめ、考察する姿勢を作り、また、それを振り返ることが最終的な「自己評価」へ繋がっていくことがわかった。

また、石井・熊野(2009)では、(3)「週フィードバック」について、そこで行われた全体ディスカッションの流れや「週フィードバック」後の「研修活動の記録」への記述を分析し、「週フィードバック」が果たす役割を検証した。その結果、まず、グループ内での個々の体験のシェア活動によって、「共感・確認」、「新情報や新しい視点への気づき」、またそ

の後のグループ内や全体でのディスカッションを通して多様な視点から言語や文化のイメージに揺さぶりがかけられることで、「日本イメージの修正」、「ステレオタイプ化の防止」、「他文化の理解と自文化への内省」、「日本語学習や異文化理解への更なる内省の促しと新しい目標への動機付け」といった役割が果たされていることがわかった。

結果、(2) (3) 2つの活動の役割や意義は確認できた。しかし、これらを含む、自律学習支援の各活動やポートフォリオ評価を学習者自身はどう捉えているのだろうか。本稿では、学習者に対して行ったアンケートや聞き取り調査などの資料を元に、自律学習支援活動や評価に対する学習者の認識について、検証することを目的とする。分析対象とした資料は、2007年～2010年の5コース(ABCDE)で収集した以下のものである。

<資料>

アンケート：(1)は、1コース(E)32名分、(2) (3)については3コース(ABC)102名分
(4)は2コース(CE)66名分

聞き取り調査：5コース約60名分

帰国レポート：3名分(調査したレポート数ではなく、取り上げたレポート数)

「アンケート」は研修終了時に学習者が自律学習支援のそれぞれの活動について、4段階で評価し、コメントを記述するものである。なお、実施した研修により、アンケートに取り上げた活動は異なるため、アンケートの回答人数にはバラつきがある。「聞き取り調査」はアンケートで聞いた内容について、数人の学習者との座談会形式でさらに詳しく聞いたものである。「帰国レポート」は帰国1ヶ月後に学習者が提出するレポートのことで、活動やポートフォリオ評価などに関する記述や、帰国後にどうつながったかなどの部分を資料とした。

4. 結果

4.1 (1)～(4)の各活動について

まず、各活動についてのアンケートの結果をまとめる(表1)。いずれの活動も「よかった」「まあまあよかった」など肯定的評価が9割以上を占めていた。尚、(2) (3)は、コースによる大きな差はなかった。

表1 自律学習支援のための各活動についてのアンケート結果

	よかった	まあまあよかった	あまりよくなかった	よくなかった
(1)自己目標設定、自己評価(32名分)	16(50.0%)	15(46.9%)	1(3.1%)	0
(2)研修活動の記録(102名分)	69(70.4%)	30(29.4%)	2(2.0%)	1(1.0%)
(3)週フィードバック(102名分)	78(79.6%)	21(20.6%)	2(2.0%)	1(1.0%)
(4)自己評価チェックリスト(66名分)	38(57.6%)	23(34.8%)	5(7.6%)	0

次に、各活動について、学習者がどのように捉えていたのか、以下概観する。枠内は、いずれも学習者の記述あるいは語りをまとめたものである。アンケートでの記述については★、帰国レポートについては■を付し、記号のないものは聞き取り調査によるものである。各記述については、表記や文法・表現の明らかな誤りのみを一部筆者が訂正した。

(1) 目標設定と自己評価

このような自己目標を立てた経験がないという学習者が多く、研修開始当初、目標設定が難しかったと言う意見が多い。しかし、研修中の自己目標設定・自己評価の重要性を認識し、研修終了時に自己評価を行う際には、帰国後の目標が比較的容易に立てられるようになったと言う。また、目標を考えることで、日本語学習の目的や、将来について考えたという意見も多く挙げられた。

自己目標設定、自己評価活動への慣れ

- ・ 目標設定は、はじめ難しかったが、自己評価のときは、帰国後の目標をもっと簡単に考えられた。
- ・ 難しかったけどよかった。はじめは遠い漠然とした目標しか立てられなかったけれど、今は自分の日本語の能力がわかるようになったので、近い(具体的な)目標を立てられるようになった。
- ・ 以前は、そのようなことを考えたことはありませんでした。でもそれは必要だと思いました。できたこととできなかったことが分かるようになっていました。(★)

研修中の目標設定、自己評価の重要性

- ・ 来日前の目標は、「日本語が上手になりたい」ということだけだった。でも、その目標は大きいと言われて、具体的な目標を考えた。目標設定や自己評価をしなかったら、後で、「研修で何をしたらろう？」と思うと思う。
- ・ 自分の目標だから、自分で評価することが大切だと思う。
- ・ よかった。はっきり「何をしたいですか、どうやってしますか」「何をがんばりましたか」を考えるのによく役に立ちます。(★)
- ・ この研修中、私はしたいことを決めて目標を持っていました。その決めた目標をとるために、何をしたいか、どうやるかということも考えていました。(★)

日本語学習の目標、帰国後の目標設定

- ・ よかった。特に「近い目標」と「遠い目標」を設定すると比べることができる。
- ・ 以前は、なぜ日本語を勉強しているかわかりませんでしたが、この自分の目標を通してよくわかるようになりました。これはいいと思います。(★)
- ・ まず何よりも大切なのは目標をたてるべきことだと思います。(中略)「したいこと」とか「できたこと」とか「遠い目標」とか「近い目標」とかを本気に考えたことはめったにないからです。しかし、今回の日本との出会いをきっかけに、今までの自分をちゃんと振り返りかえて、そして今後の自分の行き先などをじっくりと考えました。(■)

(2) 研修活動の記録

学習者は、活動が気づきへの意識付けとなったと認識していた。また、日記のように体験を時系列で書くのではなく、気づいたこと、それについて考えたことを書くという活動を通して、体験や学習を振り返ることの重要性に気づき、次第に内省に慣れていったことがうかがえた。また、その中で、自分自身の理解、自身の変化への気づきが可能になるという点から活動を評価する意見も見られた。さらに、この記録はポートフォリオの一部として、体験を残す記録として、また帰国後に友人や教師への伝達ツールとしても認識されていた。

気づきへの意識付け

- ・ 書いてよかった。例えば「日本語について」がなかったら、何も気にせずに過ごしたと思う。タスクがあったから、考えながら生活した。
- ・ 私たちの注意力をよくするために、とても役に立ったと思います。物事をみたら、それについて、もっと詳しく知りたいという気持ちがどんどん増えてきました。(★)
- ・ とてもよかった。私は今まで何も気づかずに生きていましたから、毎週記録を書いてから周りのことに気づくようになったし、自分の頭を使うようになったからです。(★)
- ・ 国へ帰ってから、いろいろなことに気をつけて生活するようになった。(■)

内省の機会、内省活動への慣れ

- ・ 好きな活動だった。日記だったら、生活のことやしたことだけで簡単に書けるが、この記録は何を書くかよく考えなければならぬ。気がついたことや新しく知った文化を考えることは必要だと思う。
- ・ 記録は、振り返る機会だと思う。この課題がなかったら、振り返らないでずっと過ごしたと思う。
- ・ 気づいたことを書くことを通して、習ったことについて考えるチャンスを与えてもらった。(★)
- ・ はじめは、日記のように書かないということが難しかった。段々書けるようになった。

自分の変化の確認

- ・ 自分の中での変化を見ることができると思う。前はこう書きましたが、今はこうです、のように。
- ・ 毎週書くと、その週にしたことを思い出して、活動や自分に対する評価もできると思います。(★)
- ・ 自分の意見を考えると、もう少し自分がわかるようになる。(★)

ポートフォリオの一部として(記録や思い出)、帰国後の伝達ツール

- ・ とても良かったです。初めて日本へ行った時の記録なので、一生でかけがえのない体験としてこのこっているからです。(★)
- ・ 毎週書くと、自分がどこに行ったか、何をしたら忘れられなくなりました。それはいいです。(★)
- ・ 帰国の後で、友達とか後輩に伝えられると思います。(★)

(3) 週フィードバック

学習者の意見で最も多かったのは、意見交換、共有の場としての認識であり、異なる体験、意見を話し合うことに対する評価は高かった。また、意見交換を通して、自分が気づかなかった日本語や日本文化・社会についての新たな側面を発見したり、異なる国の他の

学習者の意見を聞くことで、それぞれの国の文化や考え方に触れ、日本に留まらない異文化理解としての意義を見出している学習者が多い。

この週フィードバック活動と、活動記録との関連は強く意識されており、記録を書くなら共有の機会が必要、あるいは、気づきを共有するために記録が必要という意見が多く見られた。

意見交換、共有の機会

- ・ 他の人の意見を利聞くのはとても面白かったです。自分の意見に反対の意見が出たら議論になってとても楽しかったです。(★)
- ・ 一緒に同じプログラムをしているが、きっと違うことを感じます。皆さんの感想を聞いて本当に面白いと思います。(★)
- ・ 新しい意見を聞くのは、とても面白いです。同じことについて、いろいろな違う意見を聞けます。(★)
- ・ 他の学生の経験や、気がついたことについて聞くことができます。そして自分のと比べることができます。(★)

日本理解を深める

- ・ みんなの意見を聞いて、自分の考え方が広がった。友達の意見から日本や日本語について知らなかったことをたくさん知った。自分が気づけなかったことを教えてもらった。
- ・ みんないろいろなレポートを書きました。その中から、知らなかったこととか、気がつかなかったこととかがわかりました。(★)
- ・ 一人ですることができない体験を聞くことができる。それを聞いて、自分はしていないし、行っていないけれど、行った感じがする。日本について、もっとわかるようになった。

日本にとどまらない異文化の理解

- ・ 日本の生活についてだけでなく、いろいろな国からの人の考え方もなりました。(★)
- ・ ほかの人のいけんとかそれぞれの国の文化なども知るようになりました。(★)
- ・ 他の人の意見を聞いて、ほかの国の文化などを知ることができます。みんなの意見を聞いていい勉強になりました。(★)

「研修活動の記録」と「週フィードバック」の関連

- ・ 記録を書くのは大変だが、週フィードバックの活動のためには、必要だ。すぐに気がついたことを考えることはできない。「体験はどうでしたか?」「面白かった」というだけの話になってしまう。
- ・ 一週間を振り返って記録を書くことは大切だと思う。でも、それを他の人がどう考えるのか、自分の考えが間違っていないか知るために、シェアする時間は必ず必要だと思う。

(4) 自己評価チェックリスト

体験や交流などの活動を中心としたこの研修においては、試験などは行わない。「自己評価チェックリスト」は、研修内で達成したことを知る機会、自分の日本語能力について考え、できることできないことを知る機会として学習者に認識されている。また、「自己評価

チェックリスト」のレベル記述を見比べることで、次の目標を見据えることができ、継続学習の目標設定にもつながるという意見が述べられている。

達成度の確認

- ・ この研修でどれだけ達成したかを知ることができる。(★)
- ・ 自分の能力がどのくらい分かることができると思う。(★)
- ・ できることやできないことをわかりました。(★)
- ・ このようなことを考えたことがなかった。日本語で何ができるか考えるのはとても役に立つと思う。
- ・ 質問をひとつひとつみて、自分の日本語能力のレベルを考えられるから、よかった。(★)
- ・ 研修で何ができるようになったか、これはもうできる、と考えられたのがよかった。

継続目標の設定

- ・ B2の記述から、次の目標がはっきりしたのがよかった。
- ・ できないことをできるように練習したり、勉強したりしたくなると思う。(★)
- ・ 自分のつけたところのひとつ上が目標になった。

4. 2 研修における評価「ポートフォリオ評価」について

研修における評価全体について、この研修に試験が合わないということは多くの学習者に認識されており、ポートフォリオが適している理由として、学習者間のレベル差があること、日本語を使用するグループ活動が中心であること、また、日本語を使う・日本を理解する・学習に役立つものを発見するというコースの目標と合致する方法であることを挙げている。そして、試験がないからこそ自分の目標に向かうことができたと言う。また、試験のように終われば勉強が終わるのではなく、帰国後の継続目標へとつながる評価であるという意見が述べられている。

コースに合った評価

- ・ コースには色々なレベルの人がいるからテストは合わない。コースの目標は日本の体験と、日本語の勉強方法、日本語を使うことだから、記録や自己評価はこの目標にあった評価方法だと思う。
- ・ 評価が試験だったら、自分だけで勉強する。こういう形の評価だと、グループの活動が中心になって日本語で話せた。
- ・ 試験があるとプレッシャーになる。
- ・ 試験があったら、誰が一番ということだけだけど、先生のコメントを見て、私はここで間違えた、まだまだだというのがどこか具体的にわかってよかった。

帰国後の目標へのつながり

- ・ 国に帰って日本語を勉強するのはなぜかと思うし、また、自分で目標を立てられると思う。
- ・ 試験だと、試験が終われば、それで勉強は終わってしまう。ここでは自分の目標を考えながら勉強できたのでよかった。帰国後も目標はつながっている。

調査では、自律学習支援という目的とは直接の関連がない意見も見られた。学習者にとっては「研修活動の記録」は、漢字、文法などの項目学習に重きをおかないコースにおいて、文字や書く練習の場としても認識されていた。また、「週フィードバック」や「学習の振り返り」は、日本語で話したり、意見を述べたりする機会とも捉えられていた。

また、これらの活動は、通常の日本語授業とは異なるクラスや参加者全員で行われていたため、レベル差のある学習者が集まるコースにおいて、レベル差を越えた交流を可能とし、コース内の連携を高める役割も担っていたこともわかった。

このように、日本語科目でも体験活動でもない自律学習支援に関連する活動が、日本語学習の場、学習者間の交流の場として、体験交流活動を中心とするコースを陰で支える役割を担っていたことがうかがえた。

日本語学習の場

<研修活動の記録>

- ・ 気がついたことをよく考えて、日本語で自分の気持ちを伝えることを練習できる。(★)
- ・ 研修活動の記録では、できるだけ漢字を調べて書こうと決めた。漢字の力が伸びたと思う。
- ・ 最初に一文でまとめるのが難しかった。でもまとめる練習になったと思う。
- ・ 先生からのフィードバックを読んで、それができるようにした。
- ・ 研修は、体験が中心で、書く勉強が少ないので、考えを直接書く機会としてよかった。書くことで自分の考えがまとまり、わかるようになった。特に日記ではなく、気がついたことを書くのでよかった。

<週フィードバック>

- ・ 週フィードバックのじゅぎょうは大好きです。私はたくさん話すチャンスがもらいました。自分のいけんをみんなの前で話せるようになりました。今しんをもっています。(★)
- ・ 友達と先生に意見を言ったり、友達の意見を聞いたりしたのは、日本語の話しが練習できて、自分の日本語の能力がだんだんよくなった。(★)

学習者間の交流

- ・ 週フィードバックは、グループのメンバーが毎週変わるのがいい。この時間にみんな仲良くなった。
- ・ 自分のフィードバックだけではなく、他の研修生のフィードバックも聞いて、一緒にいい思い出を作るのが面白いと思います。(★)

5. 問題点の分析と解決策

4 では、学習者が認識していた各活動の意義を分析した。結果、学習者は、研修開始当初、自己目標の設定を難しく感じるが、毎週の記録への記述やその共有活動などを通して、内省活動に慣れていく。そして、研修終了時には、自己目標に対する自己評価や日本語能力の確認を通して、自己目標設定や自己評価の重要性を認識し、特に、帰国後の継続学習へ向けての意識を強くしていることがうかがえた。ただし、参加者が常に全員、活動の意義を理解していたり、内省に慣れていったりするわけではない。ここでは、問題を3つに

わけて考察し、効果的な活動のための解決策を考える。

5. 1 活動のデザイン、タスクの設定

一点目は、活動のデザインやタスクの設定の仕方によって解決できると思われる問題点である。例えば、自己目標・自己目標について、研修中意識せず重要性を理解していなかったという学習者がいるが、研修中に自己目標を意識させるような機会としては、「研修活動の記録」に教師が書くコメントや「週フィードバック」、研修中盤の「学習の振り返り」の時間以外はあまりない。「週フィードバック」において目標の達成についての話し合いも取り入れるなど、何らかの形で途中で自己目標を確認させる機会を設けることで意識付けが図られると思われる。

また、「研修活動の記録」について、三つのテーマが指定されているのが書きにくいという声が稀に聞かれる。日本語・体験・生活の三つのテーマの指定は、それを指定せず自由に書かせると日記のように体験を連ねるだけになってしまったり、「犬が多い」といった日常観察した瑣末な事象に終始してしまったりする 경우가少なくないといったこれまでの経験を踏まえたものである。また、三つのテーマが比較的ゆるやかなものであるのには、広く言語や文化を取り巻く事象を、学習者個々の興味や関心から観察するように促す意図もある。しかし、テーマは必ずこの三点でなければならないものではない。「日本語学習」と「体験」のように目標に直接つながる点について記述させてみる、三点以上に渡って記述をしたい場合に対応するなど書式を工夫することも可能である。

自己評価チェックリストについては、活動の設定後、まだ回数が重ねられていないこともあり、改善の余地が大きいと思われる。活動の意義は感じながらも、チェックすることが難しい、という学習者は少なくなく、段階数が少ない、どちらでもないことが多くて迷う、項目が多すぎるといった意見が挙げられたことから、チェックリスト自体の改善が望まれる。また、活動のデザインについても、さらなる工夫が必要である。自分で判断するのが難しいという声に応える一つの方法として、教師も同様にチェックを行い、学習者のチェックと突き合わせる、自己評価活動と同様に学習者間で話し合うといったものが考えられるが、それが果たして有効なのか検証が必要である。学習者からは、先生にもチェックして欲しいという声がある一方で、それでは自己評価ではない、という意見があり、学習者間での共有が役立つ、安心感があるという意見の一方で、友達は高く評価しがちなので共有は望ましくない、という意見が見られるからである。また、研修終了時にまとめてチェックするのではなく、各科目や体験交流活動などの課題直後に行うということも考えられるだろう。

自己目標設定・自己評価

- ・ 私は自己目標や、自己評価を大事に考えませんでした。学生に重要性を話すことが大切だと思います。(★)

研修活動の記録

- ・ 3つのテーマに決まっているのが難しい。自分で決めて書きたい。
- ・ 毎週書きたいことがたくさんあったのに、三つだけで、少ししか書けなかったのが残念だった。(★)

自己評価チェックリスト

<リストについて>

- ・ 項目が多すぎて、詳しく考えられない。段々丁寧に読まなくなった。
- ・ 三段階のレベルから選ぶのは難しい。どちらでもないとき迷った。五段階程度あるといい。

<活動デザインについて>

- ・ 自分で判断するのは難しい。先生も同じものにチェックしてくれるといい。自分の評価と比べて判断が正しいかどうか確かめたい。(★)
- ・ 先生が評価してしまうと、それは、自己評価ではなくなると思う。
- ・ チェック後、友達と話すと、自分のチェックに自信が持てるし、意見を聞いて変えることもできる。
- ・ 友達と話すと基本的にほめて高くつければいいという助言になってしまうので、個人の活動として行う方がいい。

5. 2 教師の引き出し方、話し合いの促し

二点目は、教師による支援が解決となると思われる問題である。例えば、自己目標の設定や自己評価は、教師との学習相談やクラスメートとの話し合いを通して行われるが、個人では行えなかったと思うという声が大きく、話し合いがある程度うまく働いていることがうかがえる。しかし、学習者間での作業で課題がうまく行われなかったり、学習相談でコースに合わない目標が教師によって見過ごされたりするなど、うまく働かないケースもある。また、週フィードバックにおいて、グループ内でのディスカッションが進まない、研修活動の記録に書くことがなくなるといった場合も見られる。

これらは、いずれも教師が学習者から、目標や内省、評価を引き出したり、学習者間の話し合いを促したりすることが期待される問題点である。学習相談による教師の的確なアドバイスや、学習者間の話し合いへのサポート、研修活動の記録へのコメント等の支援によって、解決が可能であると思われる。週フィードバックの全体ディスカッションにおける教師による質問の投げかけや、研修活動の記録における教師のコメントが、学習者の気づきを深めたり、再内省のきっかけとなっていることは、学習者の意見からもうかがえ、教師のサポートの重要性が示唆される。活動はいずれも指示をすれば全員がスムーズに行えるというのではなく、教師の支えは重要なものである。

うまくいった例

自己目標設定・自己評価

- ・ 一人では目標を立てたり、評価したりできなかつたと思う。書いてくるのが宿題だったらできなかつた。
- ・ 自分で考えると、はっきりした目標が出せない。友達に相談することでアドバイスがもらえる。例えば、友達が日本語が上手になりたいというのは、どのレベルまでかと質問したことで、レベルや弱いところをよく考えた。
- ・ 研修中に立てた目標をコース中意識していたので、だいたい達成できた。これは、学習相談で先生が研修中にできることとできないことをアドバイスしてくれたから。

研修活動の記録

- ・ コメントを読むと、もっと深く考えることができた。「そういえばこれは何でだろう」とか、「そういうこともあるな」、とか考えた。
- ・ 先生がコメントを書いてくれたので、もっと書きたくなって、はじめは短かつたのが、段々長くなっていった。

週フィードバック

- ・ 全体ディスカッションは、先生の司会のほうがうまくコントロールできるのでいいと思う。質問を聞いて、自分で気づかなかつたことに気がつき始めた。
- ・ 全体ディスカッションは必ず必要だと思う。板書があると、ポイントがよくわかつてよかつた。



うまくいかなかつた例

自己目標設定・自己評価

- ・ グループで話すときに、つい話がそれていき、本当に話すべきことを話せなかつた。
- ・ 自己目標を立てるときは、まだ友達になつたばかりで、私達のグループは、うまく話せなかつた。
- ・ 漢字学習を目標にしてしまつたが、研修中にその機会がなかつたので、最後はできたかどうかを確認しただけだつた。

研修活動の記録

- ・ 日本語について、始めはたくさん気がついたことがあつたのに、段々書くことがなくなつてしまつた。(★)

週フィードバック

- ・ レベルの差はあまり問題ではなかつたが、グループの中で、「同じです」とか「賛成です」だけ言つて詳しく話さない人がいると、質問を考えたりして難しかつた。

より具体的な自己目標、自己評価を引き出したり、内省を深めさせるために教師が投げかける質問、コメントの例としては、次のようなものがある。

「自己目標設定・自己評価」における教師からのコメントの例

- ・ 日本でしたいことはありますか。そのためにいつ、どこで、何をしようと思いますか。
- ・ 研修では～の機会がありますよ。
- ・ プログラムにはありませんが、自分ではそのために何ができそうですか。
- ・ 自分の日本語で弱いところはどこだと思いますか。どうしたらいいと思いますか。
- ・ 将来日本語で何ができるようになりたいですか(遠い目標)? そのためのステップ(近い目標)は?
- ・ 日本に来る前と今で自分の日本語に何か変化がありましたか。まだ足りないものは何ですか。
- ・ 日本での体験から、どんなことがわかりましたか。どうしてそう思いますか。
- ・ 国に帰ってから、どのように日本語を勉強しようと思いますか。そのために、何が必要ですか。

「研修活動の記録」における教師からのコメントの例

- ・ ○○さんの目標にもありましたね。
- ・ このポイントは面白いですね。私も考えたことがありませんでした。
- ・ そのような現象は、どんな場合が多そうですか。観察してみてください。
- ・ その現象にはどんな背景があると思いますか。
- ・ ○○さんの国と比べてどうですか。どうしてそのような違いがあると思いますか。

「週フィードバック」における教師の投げかけの例

- ・ (日本語)～さんは目標だった聴解力が上がったようですが、みなさんはどうですか？
- ・ (文化・社会体験)やってみて気がついたことがありますか。イメージと違ったことがありますか？
- ・ みなさん、同じ意見ですか。他の意見、反対の意見はありますか。
- ・ 同じような体験をした人がいますか。違う体験をした人はいますか。
- ・ みなさんの国／地域では、どうですか。どうして、同じ／違うと思いますか。
- ・ 日本では、いつもどこでもこのような現象があると思いますか。この現象をどう思いますか。
- ・ 日本人自身はどう思っているのでしょうか。

5. 3 学習者個人に関わる問題

最後は、学習者個人に関わる問題である。学習者の個性は様々であり、学習歴やこれまでの学習環境、自律学習に関わる活動への慣れや抵抗も様々である。自分に自信がないので目標が考えられない、なまけものなので研修活動の記録が書けないといった個人に関わる問題はなかなか解決しにくいものではあるが、タスクを一部受け入れやすいものに変更したり、教師が個別にサポートするなどの対応が可能だろう。

自己目標・自己評価

- ・ 自分に自信がないと、いい目標が立てられないと思います。(★)
- ・ 私は、評価をして考えるだけで、目標を立ててしなければならないことは何もありません。(★)

研修活動の記録

- ・ 私は、とてもなまけものなので、研修活動の記録を書くのは面倒で出さなかったときがあった。でも、書くことは大切なので、もっと厳しくしたほうがいい。(★)
- ・ ちょっと面倒なときがあった。後になってみれば、書いてよかった。(■)

自己評価チェックリスト

- ・ あまり本心で書くことができない。一番いい所に丸を書くことができないし、低いところに書くのも残念なので、大体間に丸を書くことになりました。(★)
- ・ アジアの人にとっては謙遜するのが普通で、高い評価は書きにくいと思う。

ただ、自己評価チェックリストについては、個人の問題ではない可能性もある。個人の性格によってチェックのしにくさが生じることはもちろんあるだろうが、学習者自身が、

アジア人にとっては高い評価は書きにくいと言っているように、国籍や地域によって共通する問題もあると思われるからである。2 の活動のデザインとも関わるが、国や地域によって最適な活動のデザインや期待される効果が異なるということも考えられる。この点については、個々の学習者がそれぞれのチェック項目において自己評価を決定した理由などの質的な調査、研究で明らかにしていく必要があるだろう。

6. おわりに

以上、体験・交流を中心とする短期の訪日研修における自律学習支援の活動や、ポートフォリオ評価について、学習者がどう捉えたか確認し、活動がうまくいかない場合の問題点とその解決策について考察した。学習者は、研修開始当初から自己目標の設定や、内省活動が容易にできるわけではないが、毎週の内省活動を通し、自律学習の重要性を認識するようになり、活動が帰国後の継続学習へと確実につながっていったことがわかった。また、ポートフォリオ評価を研修の目標に合い、継続学習につながるものとして評価していた。一方、学習者の意見から、活動のデザインやタスクの設定の改善、教師による引き出し方によって解決すべき問題点も明らかになった。

自己評価や学習ジャーナルが学習者の自律学習のためのトレーニングとして役立つという先行研究は多いが、学習者自身の認識について、調査を行ったものはあまり見られない。筆者自身も、これらの活動の役割や意義について既に分析を行ってきたが、学習者にとって本当に役立っているのか、形式的な活動となっているのではないかと自問することもあった。本調査を通し、学習者の記述や語りという生の声から、自律学習支援の活動について、学習者が、教師の意図したもの以上の意義を認識していることが確認できた。一方、学習者の声から、活動の設定上の問題点や課題も浮かび上がってきた。これらの声を今後のより効果的な支援に活かしていきたい。

<参考文献>

- 石井容子・熊野七絵(2008)「日本語・日本文化社会への気づきを促す「研修活動の記録」－自律学習の意識化を目指して－」WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』1-10、日本語教育学会
- 石井容子・熊野七絵(2009)「言語と文化への気づきを学習者間で共有する活動が果たす役割－「研修活動の記録」と「週フィードバック」の分析から－」リテラシー研究集会 2009「複言語・複文化主義と言語教育」予稿集 92-97
- 熊野七絵(2008)「大学生短期訪日研修における体験交流型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』第18号 31-46
- 境田徹・今井寿枝・和泉元千春(2009)「訪日日本語研修における学びの意識化を促す協働学習の試み－コメントカードを活用した「振り返り」活動の実践報告－」『日本語教育方法研究会誌』vol.16 No.2 30-31
- 野畑理佳・和泉元千春(2008)「自律学習支援を目指した学習相談の内省的観察」『問谷論集』第2号 83-108 日本語日本文化教育研究会